

人生80年 - 音楽とのかかわり、そして今

MusicAtelier / ムジカテリエ
編曲・作曲、合唱指揮・指導
燕友合唱団 指揮者

遠藤 謙二郎

退職して15年ほど経つ。ずいぶん年とったものだと思う。

今、音楽という括りで表される諸々の中で、充実した日々を送らせていただいている。ありがたいことと、心から思う。高齢者になってからの「セカンドライフと音楽」について書くことになった。昔のことを良く思い出す年頃なので、ちょうど良い。ひとつの思い出が、より深く眠っていた別の思い出を芽づる式に引っ張り出すことになれば、海馬に良い刺激を与え、いわゆる脳トレになろうか、それもある。今、音楽ライフの元になった、子供の頃のさまざまな情景が頭に浮かぶのは懐かしくもある。以下、今までの人生の芽づるを、音楽との関わりについて掘り起こしてみる。

種まきの頃

昭和20年(1945年)生まれ。終戦の年である。父を東京に残して、家族で田舎に疎開していた時に生まれ、3歳くらいまではそこで育った。径の小さな(20cm?)レコードが数枚入ったベージュっぽい色の丸い缶のイメージが脳裡に残っている。おそらく音楽との最初の出逢いだったのだろう。でも、どんな曲だったのか、まったく分からない。

東京に引き揚げてきても、戦災で住む家もなく、父の勤める会社の女子寮に、一家で住まわせてもらっていた。その頃のことは、良く憶えている。チャンバラごっこと共にかんけりなどの鬼ごっこ系の遊びも良くやった。そして、音楽はレコードである。戦争で焼け残ったという、数枚のレコード。もちろんSP。鉄針を付けたサウンドボックス(右図)をレコードに乗せて再生する蓄音機を、ためつすがめつしながら音楽に聴き入っていたのをまざまざと憶えている。お気に入り「美しく青きドナウ」。軍歌も何枚もあった。外国語らしき男声合唱もあった。「オオセマリー」と聞こえたが意味不明のまま。

45度くらいの角度で半開きになった蓄音機のふたに寄りかかるようにのぞき込んで聴いていたので、そのうち体重がもろにかかり、壊してしまった。両親は呆れつつも叱ること無く見守ってくれていた。さらに、レコード盤に釘で放射状の線を書くと(イ



蓄音機のサウンドボックス
下部に丸ネジで留めた針が見える。

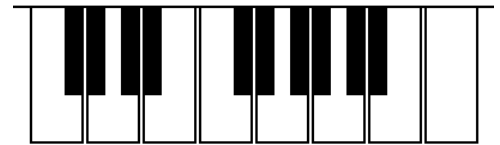
や、彫ると言うべきか)、音楽に混ざって一定の周期でコツっ、コツっ、コツっ、とくり返すのが面白くてたまらなかったが、なんと、これも叱られない。普段、厳しい両親であったが、何か思うところがあったのだろうか・・・

ここら辺が、将来オーディオエンジニアとして勤めるようになったおおもとなのだろう。近所の快飛堂(模型屋)のお兄さんが、「研究心」とあだ名を付けて私を呼んでいたことも思い出した。

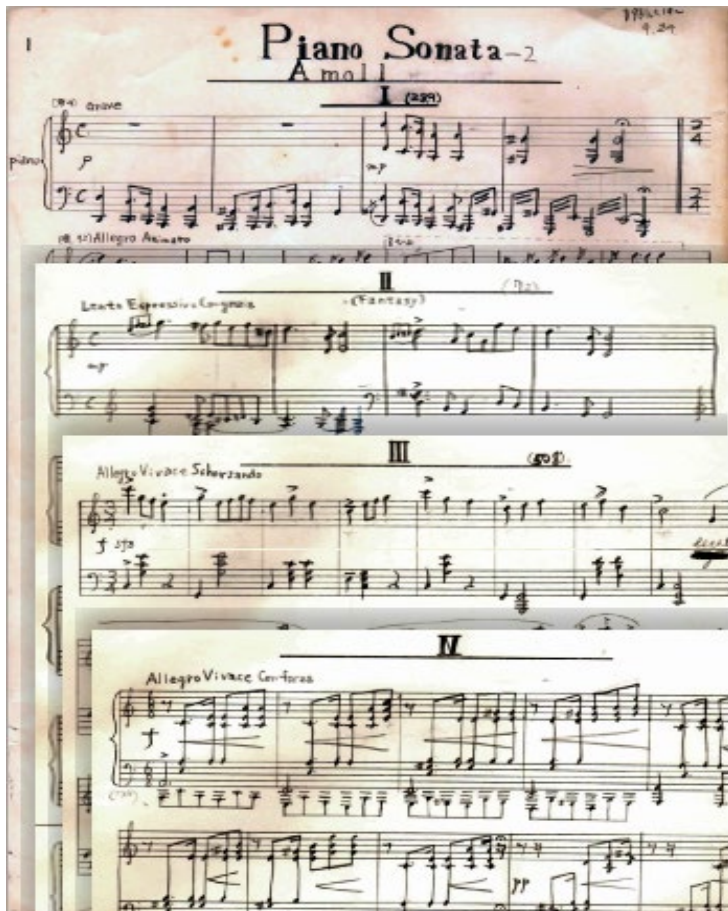
学齢前には、幼稚園に通った。「お歌」の時間には、みんなホールに集まり、先生が弾くピアノについて歌った。その中で、私一人歌わずに席を抜けてピアノの所までトコトコ行って、先生の弾くところをじっと見つめていた。ラジオやレコードでしか聴くことのなかった音楽を、目の前で「人が演奏する」こと、つまり生演奏に始めて接して感動したのだろうか。家に帰るとピアノを買ってくれとせがんだ。

めぶきの頃

・ピアノ：そうして買ってもらったピアノ。2オクターブ半ほどの卓上ピアノであった。それも、黒鍵の無いトイピアノ。黒鍵はふたつの白鍵にまたがって黒く塗られているだけの、平面的な物。描かれた黒鍵部を押すとふたつの鍵がさがり、ふたつの音が同時に鳴ってしまう。幼稚園のピアノと違う！それが不思議でならなかった。



「研究心」が発揮されたか、その想いの行きつく先は「分解調査」になる。父親に頼んだか、自分でやったかは定かでないが、ねじ回しを使って一所懸命に裏蓋を開けて中の仕組みを見た。高音になるにつれてだんだん短くなる棒状の発音体が並んでいて、鍵の押し下げが、親指の先程度の大きさの木の固まりを蹴飛ばすように叩いて発音体に当てる仕組み。上手く出来ていた。



ピアノソナタ/各楽章の冒頭部分。紙の日焼けが60余年の歳月を物語る

・作曲：小学校低学年のころから、ピアノを習い始める。卓上ピアノでは練習にならないため、週に1回、先生の家に行って練習したあと、レッスンを受ける。でも、その練習頻度では上達は遅く、教則本がなかなか終われなかった。5年生くらいの頃、先生から作曲をしてみなさいと言われ、1曲書いて持っていった。題が要ると言われ、その頃学校で教わった「牧場の朝」をもじって「牧場の露」とした。今思うと、いい加減なものと思える。でも、作曲は面白かった。私に「作曲」という大きなモチベーションを与えてくれた、立石忠敬先生は、音楽人生の最初の恩人である。

中学生になった頃、女子寮から一戸建てに移った。そして、ついにアップライトピアノを買ってもらった。いつでも本物のピアノに向きあえる喜び！1日に何時間も弾きまくった。作曲もよくした。2年と3年の学芸会で、それぞれ自作のソナチネを発表する機会も得た。クラスの女の子に「メヌエット」を贈ったりもした。今でも、ほぼ暗譜している。でも、ピアノ自体は、ちっとも上手くならなかった。

高校に行っても、ピアノと作曲は続けた。4楽章構成で29ページの長いピアノソナタ（前ページに各楽章の冒頭部を表示）を作って音楽の先生に聴いてもらった。弾き終わると、ひとことだけ「良く書いたねえ〜」と言われてがっかりしたことを思い出す。

・**指揮**：高校のクラブ活動で入った合唱部では、邦人の作った「創作オペラ」と呼ばれるものの上演を、先生の指導で毎年の恒例として続けており、その指揮をするように言われた。指揮と言っても指揮法などを教わるわけでもなく、格好だけ見よう見まねでやっていた程度ではある。でも、初めての体験に心は弾んだ。

家では、ピアノは自作の曲はもちろん、ベートーベンやショパンを弾きまくったが、完全自己流で、音を違えても、つかえても、指がまわらなくても、とにかく弾きまくった。弦を切るほどの強い弾き方に、しょっちゅう隣家からお叱りを受けた。

・**オーディオ**：ラジオやアンプを作り始めたのも中学生の頃。もともと蓄音機などで関心が高かったせいか、すぐに虜になって、秋葉原の部品街に良く足を運んだ。小遣いが足りなかった。安い鉱石ラジオをふたつ作って、やはり自作のクリスタルスピーカーを並べて、当時NHK第一と第二の2波を使って放送されていたステレオ番組「立体音楽堂」を聴いた。鉱石ラジオ+X'talスピーカーという稚拙な造りながら、音の広がり感に感動した。

のびざかりの頃

・**アドリブ**：大学に入ると男声合唱団に入った。1～2か月経った頃、先輩から100曲あまりのメロディが書かれた手書きの楽譜を渡され、「大学祭で歌声喫茶をやる。ピアノ伴奏してくれ」と言われて途方に暮れた。楽譜を見ると、初めて見る「コード」が書いてある。メロディとコードを頼りに、伴奏を作って弾けということらしい。でも、家に帰ってやってみるとなかなか楽しい。右手はメロディに徹し、左手は単純な伴奏パターンを何通りか身につけて、これをコードに従って鳴らしていけばナントカなる。慣れてきたら合いの手を入れたり、和音を厚くしたり、時にグリッサンドを入れたり、派手で目立つことをやれば、歌声喫茶の伴奏にはなった。客も大きな声で歌ってくれて、ホールは多めに盛り上がった。評判も良く、気を良くした。アドリブという概念をこのとき知った。JAZZやPOPで言われるアドリブにあこがれたが、それらにはほど遠い、似ても似つかぬ自己流であった。

・**指揮**：1年の夏休みの合宿で、指揮者のオーディションというのが行われ、僅差で1位になり学生指揮者というのになった。ここで、当時男声合唱指揮者の第一人者として名声を博していた北村協一先生の教えを受けることになり、半年あまり、毎週お宅に通って指揮法をたたき込まれた。教わったメロッドも、考え方も、今思うに宝であり、北村先生は、私の今の活動の礎を作っていたいただいた恩人である。後年、先生の主宰する合唱団のメンバーとなり、ニューヨークのカーネギーホールをはじめ、アメリ

カのいくつかの地で歌うことができたのも、貴重な体験であった。

楽しみ味わう頃

もう1人恩人がいる。当時二期会所属の中村博之先生。「音楽は心」と言い続け、声楽家としての発声法や歌唱法などの能動的な側面のほか、小説・詩、音楽、絵画、芝居・歌舞伎、オペラなどの鑑賞や、味覚についての感性など、受動的な側面についても教えていただき、様々な経験につながった。小説については、三島由紀夫の文庫本は全巻読破した。また、最近ではシドニーシェルダンのペーパーバックも、英語で読破した（知らない単語や言い回しは追わず、速読に力点を置いた）。音楽や芝居、オペラなどの舞台芸術や、いわゆるグルメを求めて、あちこち連れて行っていただいた。これらはすべて、音楽に対する感受性と共通で、音楽性の向上につながると気付かされた。その後、就職してもしばらくはこれが続き、多いに楽しみ、人生を謳歌することができた。

因みに、仕事もオーディオ エンジニアから始まり、後にオーディオ・ビデオ エンジニアとしてレコードやA/V機器の開発に長年携わり、終盤にはDVDの規格開発に参加して、世界統一規格としてまとめる会議“DVD Forum”に出席するために、毎月のように欧米の各国を訪れて、会議のかたわら様々な文化に接することが出来た。これら、仕事の絡みも含めて広義の音楽人生を満喫した時期であった。

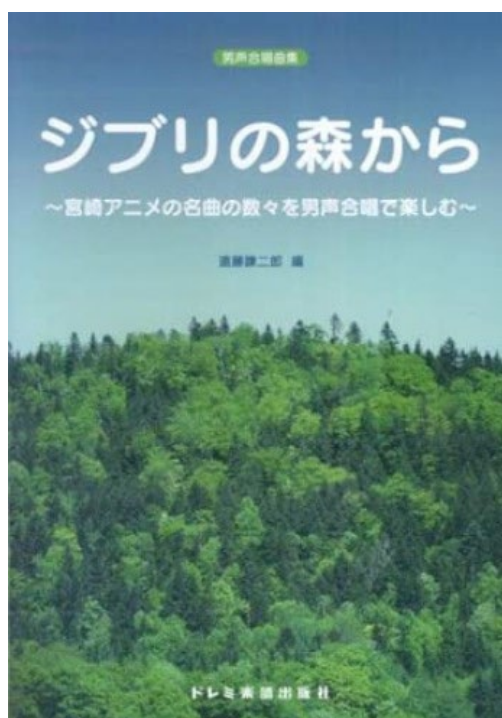
刈り入れの頃／セカンドライフと音楽

述べてきたように、子供の頃からの数々の恵まれた機会をもとに身につけることのできた知識、技術、そして感性により、今では音楽を中心に充実した生活を楽しんでいる。

・ **MusicAtelier／ムジカテリエ**：退職した前後から、音楽活動も創造的になってきた。その音楽活動の旗印として、「MusicAtelier／ムジカテリエ」を商標登録した。併せて、JASRACの信託会員になる。

・ **合唱指揮**：学生時代から始めた合唱指揮は、就職後も会社のコーラス部で、また小学校のお母さん達の集まりで続けた。退職と前後して、藤沢にあった実力のある合唱団の指揮を依頼され10年あまりの時を過ごした。この団は、合唱の名門校と言われるいくつかの大学のグリークラブのOB達も数名参加しており、良い合唱ができた。他にも、いくつかのアマチュア合唱団の指揮者を務めた。また、知人の紹介により、下野市で企画された小オペラ、合唱劇「虹のかけ橋」（原作・作詩：水樹涼子/作曲：矢内弘子、日光の開祖である勝道上人の物語）の初演の指揮を務めた。

・ **合唱編曲**：子供の頃に作曲に手を染め、学生時代にはピアノによるアドリブ伴奏に触れ、合唱団員4名によるカルテットのための編曲を多く手がけ、それらの経験をもとに



合唱団の力に合わせて数々の曲を編曲してきた。

退職してからは、ドレミ楽譜出版社から出版された男声合唱曲集「ジブリの森から」の編曲、出版社株式会社オンキョウパブリッシュによる月例の合唱ピースと、テーマを決めた曲集の出版のための編曲、砂川恵理歌さんの「一粒の種」の合唱編曲（企画：吉本興業、沖縄テレビで放映）の依頼を受け、また、合唱団マロト・タミーズや、コーラ・オリヴァ（関東学院大学OB会）などから、編曲委嘱を数多く受ける。

この中で、オンキョウパブリッシュからは、合唱ピース、合唱曲集合わせ、合計120曲あまりが出版された（合唱ピースの表紙写真を下に例示）。そのうち、「恋」（星野源）の編曲が2017年NHK音楽コンクール高校の部決勝大会のスペシャルステージの曲に採用されたほか、「日々」（吉田山田）がBS-TBSで、「心の瞳」（坂本九）がBS日本で採用され、放映された。

・作曲：友人の主宰する劇団の劇中歌の作曲や、友人の曲にピアノを付け、補作として名を連ねたりしてきた。合唱作品では、私も団員として参加している国立四工大OB男声合唱団から委嘱を受けて、「金子みすゞの詩をうたう男声合唱曲集」の作曲を今進めている。その一部は2025年の東京都男声合唱フェスティバルで初演された。



「心に残る日本の歌」南部大黒舞／中国地方の子守唄／かやの木山の／与作／まつり

感謝

生まれた頃からの音楽体験を綴ってきた。通して眺めてみると、本当に多くの機会に恵まれた幸せな人生を送ってきたものだと思う。機会を与えていただいた方々、教えをいただいた方々、一緒に活動し

てきてくれた仲間達、エールを送り続けてくれた友人達、蓄音機を壊しても叱ることもなく見守ってくれた両親をはじめとする家族や親戚と、そして最後にピアニストの妻、数え切れないすべての皆様に心からの感謝を捧げると共に、この原稿を書くことを薦めていただいた綱川立彦先生と編集の中西良様に深く感謝を捧げて、本稿を閉じる。



オンキョウ合唱ピース（OCPシリーズ）より